

## 岩猿敏生先生を偲んで —「図書館学」と「図書館」に捧げられた情熱—

中 島 幸 子

いつかこの日が来るのではないかと、一昨年8月に入院されたとお聞きした時に頭をよぎった感覚が現実になり、大変悲しく、大きな支えを失った気持ちである。昨年4月9日岩猿敏生先生は97歳の生涯を終えられた。そのわずか2か月前の2月には、京都図書館学研究会会員たちと先生の快気祝いをして、お元気な姿を私達の前に見せて下さった。手術されたときの様子を「昔なら切腹というべきところですが」とユーモアを交えてお話し下され、「次は百歳のお祝いですね！」と出席者一同確信していた。

岩猿先生は、大学図書館員から司書課程教員という同じような道を歩いてきた私にとっては、大々先輩である。1943年京都大学を卒業後、1950年九州大学司書官をスタートとして、以後20年間にわたり京都大学附属図書館事務部長を務められた。その後15年間、関西大学文学部教授として、図書館学、図書館司書課程のために尽力された。まさに、図書館員、図書館学教育者、図書館学研究者の顔を持ち、実務を知り尽くして、図書館学の理論的基盤を追求された、館界を代表するひとりであった。岩猿先生の追悼文を私のような弱輩が書くのはとても恐れ多くて、先生の功績や輝かしい生涯を十分称えることは難しいことであるが、私が岩猿先生から受けた多大な学恩に少しでも感謝したい気持ちで拙文を記したいと思う。

現在14名の会員からなる京都図書館学研究会は、2001年に「岩猿研究会」と称して、岩猿先生を偲んで、同志社大学渡辺信一先生、同大城善盛先生、梅花女子大学漢那憲治先生、関西大学倉橋英逸先生、大阪学院大学工藤一郎先生の6名が2か月に一度集まり、図書館学にまつわるトピックスを話し合っ、情報共有しようというサロン風の会であったと聞いている。2007年に岩猿研究会から京都図書館学研究会に名称変更したが、これは岩猿先生（この年に米寿を迎えられた）が、「会員も10名以上になったところで今後のことも考えて改称してはどうか」と提案されたのである。その当時は研究会を龍谷大学の会議室で開催していたので、「深草図書館学研究会」はどうかとおっしゃったが、会場が変わることもあるので、「京都」にしましょう、と全員で決めたと記憶している。その時に、岩猿先生は、どこでもいけれど、「図書館学」にするべきと強く主張され

たのである。「図書館研究会」、「図書館情報学研究会」などではなく、「図書館学研究会」に、と穏やかな口調であったが、ピシッとおっしゃったことが印象的であった。

岩猿先生は同志社大学司書課程の嘱託講師として、1981年から9年間にわたり「図書館・情報学」を担当された。2013年に司書課程60周年によせて、本誌第38号に、「同志社大学図書館学研究会」が1941年4月にスタートし、1945年まで日本全土が戦争で焦土と化していく時代に、京都においてひたすら図書館に志ある人が続けていたこと、そして戦後、いち早く1946年4月の同志社大学図書館学講習所開設につながったことを書いておられる。「図書館研究会や図書館講習会ではなく、図書館学研究会と称していたことに関心を持たざるを得ない」と「学」へのこだわりを見せておられる。

岩猿先生が同志社大学でどのような講義をなさったか残念ながら知ることはできないが、本誌には11編の論文を寄稿され、その中でも「図書館学」、「図書館学教育」についての論考が多い。前述の論文の最後に、「日本の大学における司書職養成課程としての図書館教育は、時代の推移にともなって盛衰していくことはあっても、人類文化の根幹である文献の問題にかかわる図書館学教育は、実務教育としてだけでなく、社会科学の基本的な一分野として大学に根づいていかなければならない。とくに図書館学研究に長い歴史を持つ同志社大学において、自由な学風のもとで図書館学研究とそれに基づく図書館学教育の今後の発展を期待するものである。」と結んでおられる。

このように先生は「図書館学」を「社会科学」の一分野として位置付けられておられる。まだ九州大学司書官であったときに書かれた論文「図書館学方法論試論」（1955）と、その2年後京大に移られてからの論文「図書館学における体系と方法」（1957）の2編から、新進気鋭の図書館学研究者としての先生の姿が見える。

まず「図書館学方法論試論」では、「図書館学の学としての可能性の問題を問うことが図書館活動の実践にとってどのような意味を持ちうるか」と問題提起して、「これまでの論考が実践的技術的問題に大体終始し」、「問題が技術論に止まるかぎり、いくつかの手段のうちどれが目的に対して適合性を持ちうるかの判断は試行錯誤によるほかないのであるが、この場合合理的な技術批判を可能にするのが科学でなければならない。」と、この技術批判を与えるために図書館学が必要というのである。ただ、「技術は所与の目的に対する手段に過ぎないので、技術論からは目的自体の批判は不可能である」とし、「図書館の目的とするところは何かということを図書館員は根本的な問題」としていつも考え、「かかる目的とその根底にある理念を批判的に評価することは、学としての科学の役割である」と論じておられる。

「図書館学」たるためには、方法論の追求がなされなければならないとして、方法論に論が移っていく。マックス・ウェーバーに倣って、「図書館が歴史的に先ず図書を中心とするものであるかぎり、図書館学は文化的社会現象を文化の運搬者である図書とい

う面から、単純化して限定していくところに、成り立つ」と図書館学の重要性を指摘し、結論として、「われわれの目指す図書館学は、図書館を対象とする学問ではなく、図書館現象を対象とする学問である」と定義する。そして「図書館現象」とは、「現実各種の図書館で行われている図書館活動の現象をさすのではなく」、「書写または印刷された記録類を認識・収集・組織・利用する文化的社会現象である」と説明されている。

もう1篇の「図書館学における体系と方法」では、小野氏の1936年発表の論文「図書館学序説」(1936)を取り上げ、「図書館学の体系を明確に考えた先駆的な論文」と評価されているが、「当時の図書館員の知っておくべき知識の項目の羅列に過ぎない」、「体系としてあげている4部門の間の相互の連絡がない、部門間を結び付ける働きをする糸(＝一定の方法)が考えられていないので、体系とは言えない」と手厳しく批判されている。小野則秋先生は、いうまでもなく、先述の「同志社大学図書館学研究会」の発足に力を注ぎ、いわば今ある司書課程の創設者と言っても過言ではない同志社の恩人である。

岩猿先生は、日本の図書館学、特に歴史的展開について深く研究しておられたと思う。本誌17号に、岩猿先生が司書課程のために講演された記録があるが、その中で、戦後の日本の図書館学研究の第1世代が小野則秋先生や竹林熊彦先生で、第2世代の代表は小倉親雄先生であり、ご自身も第2世代であるとおっしゃっている。第1世代が図書館学や書誌学を中心にした人文科学的図書館学であったのに対して、第2世代は社会科学的図書館学の立場をとっているとおっしゃっている。そして、「第1、第2世代は図書館学に対する考え方を巡って鋭い相互批判をしてきたけれども、情報科学の立場に立ち、図書館学研究の新しい次元を形成しつつある第3世代からの明確な批判がまだないのではないか」と懸念されている。「情報科学を自然科学の領域ととらえるならば、自然科学を基盤とする図書館学が考えられて、その間に厳しい対立、批判が十分行われぬ限り、新しい学問の地平は開けないんじゃないか」とおっしゃっている。同時に第2世代の責任は、第3世代にもっとはっきりと批判すべき対象を示すことであるとご自分を客観的に見ることも忘れていらっやらないのはさすが、と敬服する。

この日本の図書館学についての注目度は、かねがね私も低いと思っている。たとえば、『図書館ハンドブック』の「図書館学」の項目に、日本の図書館学者のことはほとんど記載されていない。1952年の初版に日本人による目録や分類など実務に関する文献が紹介されており、1960年の増訂版にわずかに「日本の図書館学」としてやはり実務的な文献があげられている。その後1977年第4版から2010年第6版補訂版に至るまで、「図書館学」の項目は欧米の図書館学を中心に書かれているだけである。

ここで、岩猿先生の著書の中に「図書館学とは何か(講座図書館の理論と実際；1、[第10章]) 東京：雄山閣、1992. p.185-203」があるので、その論考から、いわば「岩猿図

「図書館学」を一部紹介したいと思う。

まず、「図書館学の基盤が必ずしも十分に確立していないところに、社会の情報化の進展とともに、図書館学が再構築をせまられつつある。特に情報学の発展は、図書館学を図書館・情報学として再構築することを要請しつつある」ことが背景として挙げられている。

戦後の日本の図書館学の出発には、図書館法公布後の1951年以降に、日本図書館学会をはじめとして、図書館学研究を目的とした、いくつかの組織が全国的に結成されたことが大きく影響している。この結成の機運は、「アメリカの図書館学の直接的影響による図書館員意識（ライブラリアンシップ）の高揚」と、「大学において図書館学教育が行われ始めたという制度的刺激からうまれたと考えられる」と分析されている。

図書館法で定められた司書、司書補資格付与のために1951年から講習が始まったが、この講習での講師養成とともに、講習の際に用いる講義要綱作成のため、1951年6月から同年中に3回にわたり指導者講習が開催されたそうである。この講習ではアメリカの第一線の図書館人が講師として直接指導にあたり、その結果指導者講習に参加した者が講師となって、全国的にアメリカ図書館学の成果が伝達されることになったのである。岩猿先生も第1回司書講習に受講者として参加されており、その講義内容は従来の日本の図書館に対するイメージしか持ち合わせていなかった当時の図書館員にとっては、衝撃的でしたらあったとともに、図書館の明るい未来をも予想させるものであったと回想されている。この体験が「図書館はどうあるべきか。図書館とは何であるか」という根本的な命題に立ち返る必然性に結びついたと書いておられる。

図書館法により「大学における図書館学教育の開始は、図書館員教育が大学で教えられる知識分野となった」ことを意味するものである。すなわち「図書館に関する教育も図書館学研究にもとづかざるをえない。慶応義塾大学で始まった Japan Library School も大きな刺激となり、図書館管理にあたる図書館員にとって必要な知識を取り集めた実務的知識の体系である図書館管理法を、根底において統一する原則を学問的に追求しようとする図書館学研究にならざるをえなかった」と論じておられる。

1952年ごろから図書館学論が真剣に論じられていて、その中に前述の岩猿先生の「図書館学方法論」、「図書館学における体系と方法」も含まれる。のちにこの時代の図書館学論は「学問論」「科学成立の根拠に関する研究」ではない、と言われたそうだが、当時の図書館学論は明確な図書館学方法論を具体的に示すまでにはいたらなかったということであり、「図書館学論が論じられたこと自体が無意味であったわけでは決してない」とはっきり述べておられる。では図書館学方法論とは何かということについて以下のよう考察されている。

それは、現実の中から、図書館現象を抽出する視点なり方法である。ここでいう図

書館現象とは、自然現象ではなく、経済現象のように人間社会に生起する社会現象である。現実の個々の図書館そのものを直接に対象とするのではなく、現実から図書館現象を抽出し、そこに普遍的に妥当する法則が見いだされるとき、図書館学が成立する。社会科学の場合、現実認識の方法論は、具体的に概念という枠組みによって示される。

さらに、この定義から「概念という枠組みによって、現実のなかからある現象が抽出され、その現象の因果的関連が追求されることによって、概念の正当化、有効性が確認されるが、図書館学は長い間こうした有効な概念という枠組みを構築することに成功しなかった」と指摘されている。

先生は、図書館学が「学際的学問」と言われることにも言及し、「図書館学がそれ独自の学問的方法をもたなくても、諸科学の方法や成果を利用し、現実の図書館活動に対する学問的な認識成果があれば、それらを図書館学とよんでもいいことになる。ただ、学際的学問は、ある対象領域の研究のために、いろいろな学問分野の方法や成果を寄せ集めたものにすぎなくなり、図書館学の場合も学際的ということで、諸知識分野の学問方法とその成果の寄せ集めになってしまっている」と批判しておられる。

また図書館学が実学といわれることについて、「図書館現場に直接的に役立つことのみに研究のアクセントを置き、実学であるからということで、理論化の努力を軽視したり無視したりしていいというものではない。」と警鐘を発しておられる。

1970年代に導入された情報学や情報という概念について、「情報という概念を、図書館現象を抽出しうる概念的枠組みとする試みが見られ、「図書館・情報学」、あるいは「図書館情報学」の研究領域が開かれてきて、図書館学の外に情報学が発達してくると、図書館学自体もアイデンティティを問い直す必要にせまられている」と示唆しておられる。

1980年代以降はコンピュータと通信技術の飛躍的な発達とともに、伝統的な図書館像が大きく揺らいできて、「図書館学の領域拡散となり図書館学自体が固定化しない、絶えず発展成長する図書館学論の必要性を痛感する。図書館学が一つのサイエンスである限り、他の社会科学と同様に、抽出された現象の因果的関連を追及し、そこで客観的、普遍的に妥当する法則性を見出していかなければならない」と、あくまで図書館学が社会科学の中に位置づけられるという考えである。

こうして岩猿先生は、日本の図書館学についての研究に深く力を注いでおられたと思う。これは単に図書館学という学問の確立を目指すだけでなく、図書館人として実務を知り尽くされて、図書館員、図書館活動そのものの基盤としての図書館学を確立しなければならないという、ご自分に課された命題として生涯を捧げられたと思う。また、戦前の日本図書館学研究は決して不毛ではない、ということを検証されたい気持ちがあったのではないか。たぶん日本で図書館学を定義した最初の人である和田万吉氏、それか

ら同志社大学図書館学研究会を築いた小野則秋先生や戦後の研究者の系譜をたどり、図書館学がいかにドイツやアメリカからの図書館学研究から学んだものが多いとはいえ、大学教育の中に組み込まれた図書館学という学問領域が日本でどのように芽生え、発展していったかを知る必要があると考える。(先生が亡くなる直前まで取り組まれていたテーマが「和田万吉」と聞いている)「図書館・情報学」という名称が主流になった現在においても、常に「図書館学」というまさに「学的性格」を持ちうるディシプリンであることが岩猿先生の「遺言」のような気がしてならない。

最後に岩猿先生の素顔を知るエピソードを紹介しておきたい。

先生は研究会にはいつもダンディなブレザー姿で、「やあ、こんにちは」と優しい表情で教室に入って来られた。京都大学附属図書館では、女性図書館員の憧れだったという話も聞いたことがある。今でいえば、「カリスマライブラリアン」と呼ばれていたかもしれない。90歳をすぎても背筋をピンと伸ばして、会員の発表に耳を傾け、丁寧な口調で、しかし、「ここを質問されたらヤバいな」と思っているところを、的確に質問された。発表内容は会員の興味によってかなり広範であったが、質問やコメントなどを必ずおっしゃって、「何でもよくご存じだ」と失礼ながら驚いたこともしばしばであった。手術のときに病室でご覧になっていた書物が、『ソクラテスの弁明』とセネカの『人生の慰め』だったそうで、どこまでも研究者だったのである。そんな先生の楽しみはラグビー観戦だったそうで、ご自身も学生時代にラグーだったとのこと、「12月になるとラグビーを見るのに忙しいんだよ」とおっしゃって、それに続く「元日ラグビー」は欠かせずご覧になっていたようである。

先生の第一印象はちょっと気難しい風貌であったが、愛妻家でいらしかったことは有名で、足が少し不自由になられた奥様の代わりに家事もなさったと伺ったことがあった。奥様が亡くなられてさぞ寂しくなされているだろうと一度仲間とお宅にお邪魔したことがあったが、木彫をなさっていた奥様の見事な作品が飾り棚にきれいに飾られ、先生が楽しそうにお話しされ、ご夫妻の深い絆を感じたものである。先生はどこまでもダンディだったのである。

### 岩猿敏生（いわさるとしお）先生略歴

京都大学附属図書館事務部長、元関西大学教授、元同志社大学文学部嘱託講師、日本図書館情報学会名誉会員、日本図書館研究会名誉会員、2016年（H28）年4月9日、ご逝去。享年97歳。

1919年（T8）4月30日福岡県生。1943年、京都帝国大学文学部哲学科卒業。1950年、九州大学図書館司書官、1956年より1975年まで京都大学附属図書館事務長・事務部長、1976年より1990年まで関西大学文学部教授。

各種図書館団体への貢献も非常に高く、日本図書館学会では、同会が創設された1953年から4年後の57年に、現在の理事に相当する幹事に就かれ、1982年まで12期にわたりその任を続けられました。その後、1983年度から1986年度まで副会長として、1987年度から1995年度まで会長としてその活動の先頭にたって活躍されました。1980年代から1990年代は学会の発展・展開期にあたるとも考えられ、その様々な基盤整備を進められたことがわかります。

日本図書館研究会では、1957年に日図研初代事務局長に就任され、以後5期10年にわたり同会の運営を担当されました。先生は編集委員長（3期6年）や、組織委員長（1期2年）を兼務しながら日図研の基盤を固め、発展の足掛かりを築かれました。

日本図書館協会には1950年に入会され、国際交流委員会委員、評議員、理事を務められ、1982年から1994年まで参与、1995年から2013年まで顧問として、協会事業を支えられました。このように図書館学における研究、教育はもちろん、今日ある図書館の各種団体の基盤を築かれ、図書館学の発展、図書館員教育の充実だけではなく、図書館が図書館学の上に考えられる対象として、ライブラリアンシップの高揚の源泉である組織力の重要さを認識されておられたと思います。

なお、上記略歴については、以下の記事を参照しました。

小田光弘「名誉会員・岩猿敏生氏のご逝去を悼む」日本図書館情報学会会報、  
No.162、2016. 6、p.1.

「〈訃報〉岩猿敏生氏」図書館雑誌、Vol.110、No. 5、2016、p.208.

「追悼・岩猿敏生さん」図書館界、Vol.68、No. 3、2016、p.215.

**【岩猿敏生先生著作目録】**（『岩猿敏生先生著作目録―米寿記念―』（京都図書館学研究会編集・発行 2007. 3）より修正・転載）

1. 「図書館学方法論試論」『図書館学』No. 2、1955. 6、p.2-10.
2. 「図書館学論の進展」『図書館雑誌』Vol.50、No. 1、1956. 1、p.7-9.
3. 「ライブラリアンシップについて（自由論壇）」『図書館雑誌』Vol.50、No. 4、1956. 4、p.122-123.
4. 「『東壁』のこと」『京都図書館協会会報』No.34、1956. 10.（巻頭）
5. 「『東壁』日本最初の図書館雑誌」『図書館雑誌』Vol.51、No. 6、1957. 6、p.226-227.
6. 「図書館学における体系と方法」『日本図書館学会年報』Vol. 4、No. 2、1957. 9、p.1-8.
7. 「大学図書館における司書職の問題」（自由論壇）『図書館雑誌』Vol.52、No. 2、1958. 2、p.46-47.

8. 「Memoirs of libraries の2版について(1)」(質問箱)『図書館界』Vol.9、No.6、1958.3、p.181.
9. 「Memoirs of libraries の2版について(2)」(質問箱)『図書館界』Vol.10、No.1、1958.4、p.31.
10. 「国立大学の図書行政の現状と問題点」『図書館雑誌』Vol.52、No.5、1958.5、p.134-147.
11. 「図書館学と実践」『図書館界』Vol.10、No.2、1958.6、p.33-37.
12. 「図書館学における比較法について」『図書館の学と歴史』(京都図書館協会十周年記念論集)1958.7、p.1-6.
13. 「杉山吉良『裸族ガビオン』」(新刊紹介)『京都図書館協会会報』No.39、1958.9、p.2.
14. 「藤川正信：図書館学における技術性的問題—『図書館学会年報』Vol.5、No.1所載」(書評)『図書館界』Vol.10、No.4、1958.10、p.124-126.
15. 「ロベール・エスカルピ著、大塚幸男訳『文学の社会学』(文庫クセジュ；261)」(書評)『図書館界』Vol.11、No.1、1959.4、p.22.
16. 「司書職の危機」『京都図書館協会会報』No.45、1959.6、p.1.
17. 「図書館史〈特集：戦後日本における図書館学の発展〉」『図書館界』Vol.11、No.2、1959.8、p.33-37.
18. 「図書館史」『日本図書館史文献年表：第7回日本図書館学会、西日本図書館学会シンポジウム』1959.10、p.4-6.
19. 「アメリカ図書館印象記」『京都図書館協会会報』No.48、1960.1。(巻頭)
20. 「国立大学図書館専門職員採用試験について」『図書館雑誌』Vol.54、No.4、1960.4、p.114-117.
21. 『アメリカの図書館』(共同執筆)アメリカ図書館研究調査団、1960.4、96p.
22. Goto Sumio and Iwasaru Toshio. "Japanese university and college library problems," *American Libraries: Report of the U. S. Field Seminar on Library Reference Services for Japanese Librarians*. 1960, p.121-127.
23. 「私立図書館の建設を要望—市長との会見記—」『京都図書館協会会報』No.52、1960.8、p.1.
24. 「間宮不二雄氏古稀記念会編『図書館と人生』」(書評)『図書館界』Vol.12、No.4、1960.10、p.128.
25. 「高木さんに答える」『図書館雑誌』Vol.55、No.2、1961.2、p.35-36.
26. 『京都大学附属図書館六十年史』(編集及びあとがき)1961.3、342p.
27. 「清水義弘編『読書』」(書評)『図書館界』Vol.13、No.2、1961.7、p.60.



28. 「文庫いろいろ」『群像』1961. 9、p.214-215.
29. 「「国立大学図書館改善要項」の諸問題〈特集 大学図書館の諸問題〉」『図書館界』Vol.13、No.6、1962. 3、p.195-198.
30. 「戦後における大学図書館研究史（1）」『図書館界』Vol.14、No.1、1962. 4、p.1-7.
31. 「日本ファイリングKK編『書架のしおり 第3集』（書評）『図書館界』Vol.14、No.2、1962. 6、p.59.
32. 「C.アレグザンダー&アービドJ.バーク共著、大佐三四五監訳『教育資料の検索と活用』（書評）『図書館界』Vol.14、No.2、1962. 6、p.59-60.
33. 「戦後における大学図書館研究史（2）」『図書館界』Vol.14、No.3、1962. 8、p.83-89.
34. 「大学図書館とレファレンス・ワーク」*Libel.*（神戸市立図書館）No.12、1962、p.1.
35. 「基礎学力の充実を〈アンケート こんな職員がほしい〉」『図書館雑誌』Vol.57、No.4、1963. 4、p.164-165.
36. 「国立大学における分館制度」『医学図書館』Vol.10、No.3、1963. 6、p.40-41.
37. 「人・本・図書館〈連載インタビュー(II)〉」『京都図書館協会会報』No.68、1963. 7、p.3.
38. 「大学図書館改善総合委員会報告」『図書館雑誌』Vol.57、No.8、1963. 8、p.388-390.
39. 「藤川正信『第二の知識の本』（書評）『図書館界』Vol.16、No.1、1964. 5、p.23-24.
40. 岩猿敏生、岡本正、林杲之助編『日本文庫めぐりー蔵書の命運ー』出版ニュース社、1964. 9、246p.
41. 「逐次刊行物の利用法」『学術月報』（日本学術振興会）Vol.17、No.7、1964. 10、p.348-352.
42. 「開架閲覧方式について」『学術月報』Vol.18、No.12、1966. 3、p.46-48.
43. 「指定図書制度について」『学術月報』Vol.18、No.12、1966. 3、p.48-49.
44. 「司書とドキュメンタリスト」（論調）『図書館界』Vol.17、No.6、1966. 3、p.170.
45. 文部省大学学術局情報図書館課『大学図書館施設計画要項の解説』1966. 3.  
同書のうち、「学習図書館」、「図書館資料」、「図書館資料の運用」、「図書館資料の配置」の項を執筆
46. 「私立大学図書館協会『大学図書館における諸問題』（書評）『図書館雑誌』Vol.60、No.4、1966. 4、p.156.
47. 「大学図書館近代化運動の流れのもとに」『図書館雑誌』Vol.61、No.8、1967. 8、

- p.324-326.
48. 「図書館史〈特集 最近10年における図書館学の発展〉」『図書館界』Vol.19、No.4、1967.11、p.99-103.
  49. 「大学図書館の相互協力活動」『中国四国地区大学図書館協議会誌』No.10、1967.12、p.5-7.
  50. 「図書館間の相互協力」『学術月報』（日本学術振興会）Vol.20、No.12、1968.3、p.53-55.
  51. 「天理図書館の新しい冊子目録」『ビブリア』（天理図書館報）No.38、1968.4、p.103-105.
  52. 全国国立大学図書館長会議編『大学図書館の業務分析』日本図書館協会、1968.8、210p.（原案作成）
  53. 「大学図書館の問題点」（論調）『図書館界』Vol.20、No.3、1968.9、p.77.
  54. 「国立大学図書館の百年」『現代の図書館』（日本図書館協会）Vol.6、No.4、1968.12、p.186-191.
  55. 「日本の大学図書館に関する諸基準および調査とその問題点」『第1回日米大学図書館会議報告論文集 第1部』第1回日米大学図書館会議組織委員会、1969.5、p.40-50.
  56. 「エルマC.ジョンソン著、椎名六郎、椎名芙美共訳『コミュニケーション：図書館および図書館の歴史』（書評）『図書館界』Vol.21、No.3、1969.9、p.107.
  57. 「大学図書館の管理運営について」『学術月報』Vol.22、No.11、1970.2、p.9-14.
  58. 「大学図書館蔵書論」『仙田正雄教授古稀記念図書館資料論集』1970.9、p.21-34.
  59. 「日本の大学図書館に関する諸基準および調査とその問題点」『第1回日米大学図書館会議議事録 昭和44年5月15日-19日』大学図書館国際連絡委員会、1970.12、p.112-114.
  60. 「守屋秀夫、佐藤仁『図書館』（建築計画学；11）」（書評）『図書館界』Vol.23、No.1、1971.5、p.14-15.
  61. 「西ドイツの大学図書館」『天野敬太郎先生古稀記念論文集：図書館学とその周辺』1971.6、p.1478-1463（p.5-20）.
  62. 「国立大学の図書館委員会について」*Library and Information Science.*（三田図書館・情報学会）No.9、1971.9、p.161-167.
  63. 「大学図書館の職員制度」『図書館学会年報』Vol.17、No.2、1972.2、p.1-8.
  64. 「大学図書館職員のあり方」『中国四国地区大学図書館協議会誌』No.14、1972.2、p.9-10.
  65. *University Library and Information Processing. Japanese National*

*Commission for UNESCO, Training Course in Documentation Techniques in Asia. Final Report. April 1972.*

66. 「比較図書館学について (提言)」『図書館界』Vol.24、No. 2、1972. 6、p.43.
67. 「戦後の大学図書館における職員の問題―司書職制度確立運動を中心として―」『大学図書館の管理運営：第2回日米大学図書館会議応募論文集』大学図書館国際連絡委員会、1972. 7、p.63-72.
68. 「戦前のわが国における図書館員問題の展開 (付) 竹林熊彦先生をしのんで」『芸亭』(天理大学図書館学研究室年報) No.12、1972. 8、p.5-21.
69. 「アメリカの大学図書館における academic status の問題」『大学図書館研究』(国立大学図書館協議会) No. 1、1972. 12、p.3-12.
70. “Japanese university library standards and surveys,” *University and Research Libraries in Japan and the United States: Proceedings of the First Japan-United States Conference on Libraries and Information Science in Higher Education, Tokyo, 15-19 May 1969*. Ed. by Thomas Buckman, W.M. Tsuneishi. Chicago, ALA, 1972, p.91-100.
71. 「椎名六郎『新図書館学概論』」(書評)『図書館界』Vol.25、No. 1、1973. 6、p.31.
72. 「日本の大学図書館における職員問題」『大学図書館研究』No. 2、1973. 8、p.82-87.
73. 「わが図書館を語る (6)：京都大学」『窓』No. 6、1973. 9、p.42-45.
74. 「戦後のわが国における学術情報流通体制の問題」『芸亭』No.13、1973. 10、p.12-28.
75. 「大学図書館組織論」『図書館界』Vol.25、No. 4、1973. 12、p.124-132.
76. 「大学図書館員の育成と図書館学教育」*Library and Information Science*. No.11、1973. 12、p.73-82.
77. 「日本の大学図書館における職員問題」『第2回日米大学図書館会議報告書：70年代の大学図書館』大学図書館国際連絡委員会、1974. 3、p.79-88.
78. 「英国における図書館学教育の発展」『芸亭』No.14、1974. 10、p.7-21.
79. 「東壁について」『東壁』復刻版、学術文献普及会、1974. 11、p.23-32.
80. “Personnel in the university libraries,” *Issues in Library Administration: Papers Presented at the Second United States - Japan Conference on Library and Information Science in Higher Education, Racine, Wisconsin, October 17-20, 1972*. Ed. by W. M. Tsuneishi, T. R. Buckman, Y. Suzuki. New York, Columbia University Press, 1974, p.107-122.
81. 「アメリカにおける図書館・情報サービスの全国計画について」『びぶろす』

- Vol.27、No.1、1976. 1、p.4-13.
82. 『大学図書館』（日本図書館学講座；6）雄山閣、1976. 2、259p.
83. 「第3回日米大学図書館会議について」『大学図書館研究』No.8、1976. 3、p.107-110.
84. 「第3回日米大学図書館会議について」『公立大学図書館協議会会報』No.7、1976. 4、p.14-21.
85. 「図書以外の資料とその活用」『図書館司書専門講座講義資料』（国立社会教育研修所）1976. 6、p.1-12.
86. 「偉大な図書館人」『Lib. 京都産業大学図書館報』Vol.3、No.2、1976. 6、p.1.
87. 「これからの大学図書館」『大学図書館職員講習会テキスト—昭和51年度—』文部省学術国際局編、1976、p.25-26.
88. 椎名六郎、岩猿敏生『図書館概論』（日本図書館学講座；1）雄山閣、1977. 1、246p.
89. 「椎名六郎先生を憶う」『図書館界』Vol.28、No.5、1977. 1、p.221-222.
90. 「椎名六郎先生と図書館学」『図書館雑誌』Vol.71、No.3、1977. 3、p.131-132.
91. 「Philosophy of Librarianship について」『図書館学』（西日本図書館学会）No.30、1977. 3、p.11-16.
92. 「大学図書館」『図書館ハンドブック』日本図書館協会、1977. 3、p.108-111.
93. 「建築家と図書館員と図書館」『籍苑』（関西大学図書館報）No.3、1977. 3、p.4-5.
94. 「相互協力活動の現状と将来展望」*Librarian.*（専門図書館関西地区協議会）No.7、1977. 4、p.1-6.
95. 「学術情報と大学図書館」『大学図書館研究』No.10、1977. 5、p.68-71.
96. 「図書館員の専門職性と図書館組織」『私立大学図書館協議会会報』No.68、1977. 6、p.15-19.
97. 「Welch, Theodore F. *Toshokan: Libraries in Japanese Society.*」（書評）『図書館界』Vol.29、No.2、1977. 7、p.68-70.
98. 「戦後の大学図書館における司書職制度問題に関する史的展望」『大学図書館研究』No.11、1977. 10、p.63-74.
99. 「図書館学と図書館員」兵庫県大学図書館協議会 昭和51年度研修会（10月8日）『研修会・研究会のためのまとめ』No.5、1977、p.3-5.
100. 「天野敬太郎氏—専門家訪問—」『書誌索引展望』1巻4号、1977. 11、p.253-258.
101. 「専門職としての大学図書館員」『大学図書館職員講習会テキスト（昭和52年度）』文部省学術国際局編・発行、1977、p.23-25.

102. 「図書館界の展望」 *Library and Information Science News*. Vol.14、1978. 4、p.1-2.
103. 「田中敬と『図書館教育』」『図書館教育』田中敬著 復刻版（復刻図書館学古典資料集）日本図書館協会、1978. 4、巻末 p.1-8.
104. 「中国図書館の印象」『古辞書叢刊消息』（雄松堂書店）No.6、1978. 9、p.6-7.
105. 「プロフェッションとしての大学図書館員の問題」『図書館雑誌』Vol.72、No.10、1978.10、p.501-504.
106. 「椎名先生と図書館学」『椎名六郎先生図書館学論文集』椎名先生顕彰会、1978、p.339-340.
107. 「田中敬（1880-1958）〈先人を語る〉」『図書館雑誌』Vol.73、No.1、1979. 1、p.37.
108. 「中国図書館印象記」『大学図書館研究』No.14、1979. 4、p.1-7.
109. 「社会主義図書館学と自由主義図書館学」『同志社大学図書館学年報』No.5、1979. 9、p.2-10.
110. 「Fukuda, Naomi, ed.: *Bibliography of Reference Works for Japanese Studies*. Center for Japanese Studies, The University of Michigan, 1979, 210p.」（書評）『図書館界』Vol.12、No.2、1980. 7、p.78-79.
111. 「フォルシュティウス；ヨースト共著『図書館史要説』（書評）『図書新聞』1980年7月5日
112. 「大学図書館の管理運営について」（講演）『東海地区大学図書館協議会誌』No.25、1980. 8、p.37-41.
113. 「書誌学・図書学・図書館学」『ビブリア』（開館五十周年記念特集号）No.75、1980.10、p.452-461.
114. 「竹林熊彦の日本図書館史研究について」『同志社大学図書館学年報』No.6、1980. 10、p.2-9.
115. 「比国できいた「見よ東海の空明けて」」『図書館雑誌』Vol.74、No.11、1980.11、p.627.
116. 「私の情報整理学―知的生産へのプロセス」『関西大学通信』105号、1980年11月28日
117. “Amano, Keitaro”; “Mamiya, Fujio” *ALA World Encyclopedia of Library and Information Services*. Chicago, ALA, 1980, p.33-34 ; p.343.
118. 「学校図書館の現状と課題（講演）」『図書館研究』（大阪府高等学校図書館研究会）No.17、1981. 2、p.67-69.
119. 「台湾の図書館」『図書館雑誌』Vol.75、No.7、1981. 7、p.402-404.
120. 「台湾の大学図書館」『大学図書館研究』No.19、1981.11、p.76-79.
121. 「IFLA（国際図書館協会連盟）について」『籍苑』No.13、1982. 3、p.2-3.

122. 「今後の大学図書館」『関西大学通信』（特集号）1982年4月16日、p.5.
123. 「大学図書館長論」『図書館界』Vol.34、No.1、1982. 5、p.88-93.
124. 「大学図書館員の養成」『同志社大学図書館学年報』No.8、1982. 6、p.2-14.
125. 「図書館学論とライブラリアンシップ」『論集・図書館学研究の歩み第2集：図書館学の研究方法』日本図書館学会研究委員会、日外アソシエーツ、1982. 9、p.7-24.
126. 「人文科学分野の情報のデータベース化」『関西大学通信』121号、1982年9月21日
127. 「長澤雅男『情報と文献の探索－参考図書の解題－』（書評）『学燈』Vol.79、No.12、1982. 12、p.66-67.
128. 「幅広い図書館学の研究者 田中敬」『図書館を育てた人々 日本編 I』石井敦編 日本図書館協会、1983. 6、p.83-88.
129. 「『書籍館』から『図書館』へ」（研究ノート）『図書館界』Vol.35、No.4、1983. 11、p.195-198.
130. 岩猿、長澤、藤野、丸山共編『新・図書館学ハンドブック』雄山閣、1984. 6、430p.
131. 「書物との出会い」『大学時報』No.179、1984年11月20日、p.36-39.
132. 「好学の士 菊池租先生」『図書館雑誌』Vol.78、No.12、1984. 12、p.834.
133. 「鈴木平八郎『国立図書館－近代的機能の展開－』（書評）『図書館界』Vol.36、No.6、1985. 3、p.415.
134. 「菊池先生の全業績の回顧を」『図書館学』No.46、1985. 3、p.48.
135. 「新しい図書館の伝統の創造を」『関西大学通信』146号、1985年5月16日
136. 「図書館建築に対する貴重な提言－鬼頭梓建築設計事務所編『図書館建築作品集』（書評）『図書館雑誌』Vol.79、No.5、1985. 5、p.275.
137. 「図書館学教育と司書講習」『同志社大学図書館学年報』No.11、1985. 5、p.2-8.
138. 「26年前のアメリカ図書館視察団」（座談会）『ライブラリアンズ フォーラム』Vol.2、No.2、1985. 8、p.2-14.
139. 「『田中敬著作集 6巻』（新刊紹介）『図書館界』Vol.37、No.5、1986. 1、p.258-259.
140. 「図書館情報とネットワークについて」『私情協会報』第85-3号（33号）、1986年1月23日、p.28-32.
141. 「図書館情報とネットワークについて」（講演要旨）『技苑』（関西大学工業技術研究所）No.47、1986. 3、p.3-7.
142. 「『21世紀への大学図書館シンポジウム』に参加して」『図書館界』Vol.38、No.1、1986. 5、p.39-41.
143. 「新しい大学図書館像について」（講演要旨）『図書館だより』（大阪府立大学附属

- 図書館) No.18、1986. 6、p.4-6.
144. 「大学図書館とレファレンス・ワーク」『りべる―黎明期の参考事務』志智嘉九郎編 私家版 1986. 8、p.27-28.
  145. 「はしがき」『菊池租図書館学論集』菊池租図書館学論集刊行会編・発行、1986. 8、342p.
  146. 「ライブラリアンシップと国際性」『図書館界』Vol.38、No. 5、1987. 1、p.205-209.
  147. 「日本の大学図書館の蔵書構成」『21世紀への大学図書館シンポジウム 蔵書論』京都外国語大学附属図書館、1987. 2、p.71-90.
  148. 「裏田会長のご逝去を悼む」『図書館学会年報』Vol.33、No. 1、1987. 3、p.23-24.
  149. 「21世紀の図書館と図書」『同志社大学図書館学年報』No.13、1987. 5、p.2-12.
  150. 「今日までの日米大学図書館間の交流について」(英文つき)『日米大学図書館セミナー会議録(昭61. 8. 24)』丸善、1987、p.19-26 (英文 p.113-123)
  151. 「わが国における図書館学教育の諸形態と問題点」『文化学年報』(同志社大学) 第37輯、1988. 3、p.1-22.
  152. 「図書館総説」『図書館情報学ハンドブック』図書館情報学ハンドブック編集委員会編、丸善、1988. 3、p.139-148.
  153. 「中世大学における図書館の成立」『大学図書館研究』No.32、1988. 6、p.89-95.
  154. 「『ALA 図書館情報学辞典』」(書評)『学燈』Vol.85、No.11、1988. 11、p.68-69.
  155. 「積極的な勉強への移行を」『葦』(関西大学教育後援会会報) No.81、1988. 12、p.45.
  156. 「情報化社会と図書館学」『図書館学』No.54、1989. 3、p.2-5.
  157. 「書誌情報とデータベース」『情報処理論 I』三上市蔵編 培風館、1989. 4、p.135-143.
  158. 「図書館学と情報学」『同志社大学図書館学年報』No.15、1989. 5、p.54-62.
  159. 「総合図書館建設への参加を喜ぶ」『関大』(関西大学校友会) 1990年3月15日
  160. 「感謝と喜び」『関西大学通信』No.189、1990年3月20日、p.6.
  161. 「21世紀の大学図書館」『籍苑』No.30、1990. 3、p.5-7.
  162. 「学会長就任に当たって」『日本図書館学会会報』No.54、1990. 4、p.1-2.
  163. 「図書館とはなにか」『図書館ハンドブック』5版、日本図書館協会、1990. 4、p.1-8.
  164. 「革袋に新しい酒を」『司書講習の三十年』桃山学院大学社会教育センター編刊、1990. 12、p.1.
  165. 「戦後の図書館学についての回想―竹林、小野先生の業績にふれながら―」『同志社大学図書館学年報』No.17、1990. 6、p.33-45.
  166. 「図書館資料の諸問題」(講演)『平成3年度公立大学協会図書館協議会研修会報告

- 書』神戸商科大学附属図書館、1991、p.43-52.
167. 「図書館あれこれ」『京都府私立学校図書館協議会会報』No.41、1992. 3、p.21-30.
168. 高山正也、岩猿敏生、石塚栄二『図書館概論』（講座 図書館の理論と実際 1）雄山閣、1992. 4、237p.
169. 岩猿敏生、大城善盛、浅野次郎『大学図書館の管理と運営』日本図書館協会、1992. 4、247p.
170. 「小倉親雄先生と図書館学研究」『同志社大学図書館学年報』No.18、1992. 6、p.50-56.
171. 「書誌編纂に捧げた一生（追悼・天野敬太郎先生）」『日本古書通信』Vol.57、No. 9、1992. 9、p.24.
172. 「天野敬太郎先生をしのぶ」『図書館雑誌』Vol.86、No. 9、1992. 9、p.680.
173. 「学会創立40周年にあたって」『日本図書館学会会報』No.69、1993. 6、p.1.
174. 「小野則秋の図書館学研究について」『同志社大学図書館学年報』19号別冊、1993. 6、p.1-14.
175. 「刊行のことば」『図書館情報学研究文献要覧（1982-1990）』日本図書館学会編集委員会編 日外アソシエーツ、1993. 6.
176. 「『圃研究』と『図書館雑誌』」『図書館界』Vol.45、No. 4、1993.10、p.344-351.
177. 「大学図書館の国際的役割」『公立大学協会図書館協議会研修会報告書』大阪府立大学総合情報センター、1993.12、p.31-36.
178. 「日本における図書館学の歩み」*Library and Information Science*. No.31、1993、p.13-142.
179. 「日本図書館学史上における小野図書館学の意義について」『同志社大学図書館学年報』20号別冊、1994. 6、p.1-19.
180. 「ゴットフリート・ロスト著 石丸昭二訳『司書一宝番か餌番か』」（書評）『図書館界』Vol.46、No. 4、1994.11、p.178-179.
181. 「大学図書館への期待」『大学と教育』No.13、1994.12、p.2-5.
182. 「改革の時代」『関西大学文学部論集』（文学部創設七十周年記念特輯）Vol.44、1995. 3、p.17-18.
183. 「小田泰正先生と図書館研究」『情報技術と図書館』小田泰正先生追悼論文集編集委員会編・発行、1995. 3、p.143-152.
184. 「はしがき」同上（183）、p.i-ii.
185. 『情報処理技術の展開に基づいた図書館情報学教育の高度化についての研究』（平成6年度科学研究費補助金〈総合研究A〉研究成果報告書）1995. 3、p.25-28.
186. 「P. S. ブレイビク、E. G. ギー共著 三浦逸雄等訳『情報を使うカー大学と図書



- 館の改革』(書評)『大学図書館研究』No.47、1995. 8、p.58-61.
187. 「『日本図書館研究会50年史』(第Ⅰ期、第Ⅱ期)」『図書館界』Vol.48、No. 4、1996. 11、p.170-189.
188. 「永末十四生君を悼む」『図書館文化史研究』No.13、1996. 12、p.15-19.
189. 「序文」『大学図書館の管理と運営』(日本図書館協会、1992)の韓国語版 啓明大学校出版部、1997. 2、p.iii-iv.
190. 「序」『学術用語集 図書館情報学編』文部省、日本図書館学会編 丸善、1997. 3、p.iii-iv.
191. 「書誌学者・図書館学者としての富永先生」『図書館界』Vol.49、No. 1、1997. 5、p.5-6.
192. 「最後の文人図書館長富永先生」『ビブリア』No.107、1997. 5、p.7-13.
193. 「初の“体系的”な図書館学講座の誕生」『雄山閣八十年』雄山閣、1997. 5、p.57.
194. 日本図書館学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』丸善、1997. 9、(多くの項目を執筆)
195. 「図書館員養成教育と図書館学教育」『同志社大学図書館学年報』23号別冊(通巻8号)、1997. 11、p.1-22.
196. 「根本彰『文献世界の構造ー書誌コントロール論序説』」(書評)『図書館界』Vol.50、No. 2、1998. 6、p.114-115.
197. 「図書館文化史方法論について」『図書館文化史研究』No.15、1998. 9、p.1-10.
198. 「序文」『図書館人生五十年』木村秀明著 私家版、1998. 10.
199. 「戦前のわが国における大学図書館研究」『大学図書館研究』No.54、1998. 12、p.1-8.
200. 「図書館総説」『図書館情報学ハンドブック』図書館情報学ハンドブック編集委員会編第2版 丸善、1999. 3、p.694-706.
201. 「二人の図書館人生(木村秀明、加藤一英)」『図書館学』No.74、1999. 3、p.1-5.
202. 「高橋重臣君をしのぶ」『図書館界』Vol.51、No. 4、1999. 11、p.192-194.
203. 「大学図書館変革期の20年」『静修』(京都大学附属図書館創立100周年記念)1999. 11、p.9.
204. 「目録と書目と書誌」『同志社大学図書館学年報』26号別冊(通巻11号)、2000. 5、p.1-12.
205. 「目録におけるイロハ順排列から五十音順排列へ」『図書館学』No.77、2000. 9、p.26-30.
206. 「目録の「排列」と「配列」」『図書館界』Vol.52、No. 6、2000. 3、p.316-317.
207. 「天野敬太郎編、深井人詩解説『図書館学関係文献目録集成』(新刊紹介)『図書

- 館界』Vol.53、No.1、2001. 5、p.28-29.
208. 「菊池租の図書館学研究」『図書館学』No.79、2001. 9、p.1-7.
209. 「日米図書館文化の交流と鈴木幸久教授」『鈴木幸久先生喜寿記念論集』同論集刊行会、2001. 10、p.133-142.
210. 「日本図書館史の時代区分」『図書館文化史研究』（創立20周年記念号）No.19、2002. 9、p.9-19.
211. 「図書館に捧げた半世紀」『図書館学』（木村秀明先生追悼号）No.81、2002. 9、p.42.
212. 「公共図書館員と図書館史研究」『日本図書館文化史研究会ニューズレター』No.84、2003. 4、p.7-9.
213. 「戦前のわが国公共図書館における有料制の問題について」『同志社大学図書館学年報』29号別冊（通巻14号）、2003. 9、p.1-15.
214. 「日本図書館史の時代区分の問題；歴史における断絶と連続」『図書館文化史研究』No.20、2003. 9、p.22-34.
215. 「『図書館学』の初期の頃の寄稿者たち」『図書館学』No.83、2003. 9、p.1-12.
216. 「『図書館小識』の増訂版について」『図書館雑誌』Vol.97、No.10、2003. 10、p.733-734.
217. 「司書・司書教諭課程の設置にかかわって」『梅花女子大学司書・司書教諭課程20周年記念誌』2004. 3、p.2.
218. 「日本における図書館の歩み」『国際交流』（国際交流基金）Vol.26、No. 3（通巻103号）、2004. 4、p.39-43.
219. 「日本文庫史略史」『同志社大学図書館学年報』30号別冊（通巻15号）、2004. 6、p.1-15.
220. 「ヘンリー・ペトロスキー著 池田栄一訳『本棚の歴史』（書評）『図書館界』Vol.56、No. 3、2004. 9、p.196-198.
221. 「日本近代公共図書館史の転機としての1920年代」『文化学年報』（同志社大学；渡辺信一先生退職記念論文集）第54輯、2005. 3、p.49-62.
222. 「渡辺信一教授の人と業績」『生涯学習時代における学校図書館パワー』（渡辺信一先生古稀記念論文集）同論文集刊行会、2005. 3、p.1-9.
223. 「南先輩を憶う」『図書館界』Vol.58、No. 2、2006. 7、p.144-145.
224. 『日本図書館史概説』日外アソシエーツ、2007. 1、248p.
225. 「特別講演 図書館文化史と図書文化史」『図書館文化史研究』No.25、2008、p.15-27
226. 「九州と三人の図書館史家—竹林熊彦、小野則秋、永末十四雄」『図書館学』、No.93、2008、p.1-12.

227. 「書評反論 石山洋氏の拙著『日本図書館史概説』に対する書評に答える」『図書館文化史研究』No.26、2009、p.97-107.
228. 「河井弘志著、ドイツの公共図書館思想史、京都大学図書館情報学研究会、2008. 10、298p.」（書評）『図書館界』Vol.61、No. 3、2009. 9、p.216-217.
229. 「和田萬吉と東京帝国大学付属図書館の改革」『図書館学』No.99、2011. 9、p.1-6.
230. 「図書館教育と図書館学教育（同志社大学図書館司書課程60周年記念特集号）－（60周年によせて）」『同志社大学図書館学年報』No.38、2012、p.139-145.
231. 「文庫、書籍館、図書館そして「壁のない図書館」へ」『図書館学』No.100、2012. 3、p.1-9.

（なかじま さちこ。同志社大学社会学部嘱託講師）